

# 倫理的ふるまいとは何か：研究と臨床のまじわり

*Considering about ethical behavior: Clinical study through the basic*

糸川 昌成

●東京都医学総合研究所／東京都立松沢病院精神科

## 1. はじめに

規制やガイドラインは、不祥事や違反行為をきっかけに策定されることが多い。最近の出来事では、文部科学省が平成26年8月26日付で研究不正に対するガイドラインを発表したことが記憶に新しいが、同年1月に生じたSTAP細胞事件がきっかけだった。運転免許の更新時に、交通違反者へ凄惨な事故現場の映像を繰り返し見せることに、違反を抑制させる効果があることは実証されている。だから、研究倫理の研修でも、ナチスの人体実験への反省から生まれたニュールンベルク・コードやそこから派生したヘルシンキ宣言、1932年に始められたアフリカ系米国人の人体実験であるタスキギー梅毒事件など、非倫理的な事件を学ばせるのである。非倫理的行為を知ることで、受講者が倫理的良心を滋養されることはあるだろう。しかし、本来“学ぶ”とは反面教育ではなかったはずだ。ここで、中井久夫の「医学の修練について」の冒頭部分を紹介して、学ぶという行為についてもういちど考えてみる。

『鉛筆を削るという行為を、全く文章だけで伝達することは可能か。鉛筆もナイフも見ただけの人間に、実際に文章を読み終わった時に鉛筆が削れるように、と。

多分可能だろう。けれども、一冊の本を要するだろう。そしてあまり器用にはやれないだろう。目の前で鉛筆を削ってみせること、初めて削る時そばにいて、出来栄えについて一言、二言述べること。このほうがずっと効率的である。』

上記の中井の論考を援用すれば、倫理を学ぼうとする初心者がいたとして、倫理を文字だけで理解するには一冊の書籍を要してしまうとは言えないだろうか。鉛筆を見たことも削ったこともない初心者の前で、鉛筆を削ってみせるように倫理的行為の実際を紹介できれば、倫理を腑に落ちる体験として理解できるのではないだろうか。

倫理に<sup>もと</sup>倣う行為を目の当たりにすることから倫理を学ぶのではなく、倫理的にふるまった先人を目の当たりにすることで倫理を学んでみようと思う。

## 2. ウィリアム・オスラー

ウィリアム・オスラーはジョンズ・ホプキンス大学の初代内科学教授で、Osler結節（感染性心膜炎）やOsler病（遺伝性出血性毛細血管拡張症）で著名な医師である。また、多くの医師でベッドサイドを訪れる回診という教育診療スタイルを考案したことでも知られる。

Oslerがジョンズ・ホプキンス病院の食堂で食事していると、近くの席のイギリス人青年が倒れた。Oslerが診察すると天然痘だった。青年をJohns Hopkins大学病院へ入院させ力を尽くして治療したが青年は亡くなってしまった。Oslerは遺体を解剖し、所見を論文発表した。Oslerは、遺体をBaltimoreの墓地に埋葬すると、青年の療養と最期の様子を手紙にしたため、埋葬した墓地の写真を遺品とともにイギリスの実家へ送った。学会でイギリスを訪れたOslerは、偶然、青年の姉と出会う。姉はOslerの手紙、弟の治療、最期を看取ってくれたことに礼を述べ、年若い母親がOslerに会いたがっていることを伝えた。Oslerはロンドンから電車を乗り継ぎ郊外に住む母親へ会いに行った。母親は、Oslerが息子を最期まで治療してくれたこと、死後も大切に息子を扱ってくれたことに感謝した。

Oslerにとっての倫理的ふるまいとは、患者の尊厳が命だけでなく患者に関わるすべてにあると考えたことだ。丁寧な診察を回診というスタイルで複数の医師によって議論し教育に役立てた。病理解剖を行って臓器から学べることを余さずくみ取り、所見は論文発表という形で多くの専門家の臨床に資した。埋葬を行い、家族へ手紙と写真を送り、求められれば遺族に会いに出かけた。患者の病と死を、尊厳を持って意義づけたのである。

研究者としてのOslerの倫理観とは、顕微鏡のなか

の臓器に尊厳を感じ、死後の霊にまで誠意を尽くした行為にある。研究を遂行するという行為が、Oslerにとって検体提供者の尊厳を重んじる倫理観と一致したのだ。

### 3. 野口英世

野口英世は、上司フレクスナーへ以下のような手紙を書いた。

「私のところの技術員のStevenは、私が病気になって以降、仕事に励むこと実に凄いものです。培養は他の菌やカビに汚染されるものはひとつもありません。ロッキー山紅斑熱ウイルスはちゃんと維持されていました。彼の月給を7月から10ドル上げてやるとおっしゃいましたね。この追伸は彼のことを先生に覚えておいていただくためです。彼が昇給しないなら私は罪人になった気がします。彼には妻と赤ん坊がおります。」

野口の入院をきっかけに、9カ月Stevenがロッキー山紅斑熱ウイルスをモルモットに注射してウイルスを継代維持した。ところが、Stevenがロッキー山紅斑熱に罹患し死亡しまったのだ。23歳の未亡人と赤ん坊が残された。野口は技術員に危険なウイルスの継代を任せたことを悔い、以後、継代は自分で行い二度と技術員にはさせなかった。フレクスナーへの手紙はこう結ばれていた。

「この事故の私の責任と思われまます点について、いかようの御処分をもお受けする所存でございます。」

野口は秘書だったTildenに実験を教えた。見込んだ通り実験の腕が上がったTildenを技術員に昇格させるとColumbia大学へ学生登録させ修士号を取得させた。

野口英世にとっての倫理的ふるまいとは、研究室の中で比較的弱い立場の人(研究者より技術員、技術員よりは秘書)を大切に遇することだった。勤勉で成果をあげる技術員の生活を保障し、正式な教育を受ける機会を与えたのである。

### 4. アルバート・アインシュタイン

アインシュタインは1955年に「ラッセル・アインシュタイン宣言」を発表し、核兵器廃絶・科学技術の平和利用を訴えた。宣言のなかで科学の発見した真理を人類の福祉と平和にのみに役立てるよう、科学者を含むすべての人が、科学成果の誤用・悪用を防ぐことに不断の努力を続けなければならないと述べた。

なぜ、Einsteinは宣言をしたのか？それは、自らがマンハッタン計画に加担した過去を悔いたからだ。マンハッタン計画とは、原子爆弾開発・製造のために、科学者、技術者を総動員した英・米・加の計画であり、当初、ナチスが原爆を手にする人類の危機を救うために米英が先に原爆を開発すべきという趣旨から発

足した。マンハッタン計画により、1945年7月16日にニュー・メキシコで原爆実験が初めて行われ、1945年8月6日に広島へ、8月9日に長崎へ原爆が投下された。

ところが、ヒトラーは1945年4月30日に自決し、5月7日にドイツは無条件降伏していたのだ。「ナチスの原爆使用から世界を救う」というマンハッタン計画の目的は達成されていたにもかかわらず、科学の暴走を止めることができなかったのである。Einsteinにとっての倫理的ふるまいとは、半生を科学の誤用・悪用を防ぐ努力を怠らない活動に費やすことだった。

### 5. 科学と倫理

科学技術は受精卵のゲノムを編集できるところまできている。メンデル型の単一遺伝子病だけでなく、技術的にはcommon diseaseのリスク多型も編集が可能となった。精神疾患のリスク多型、IQとリンクする多型、高い運動能力、外交的な性格傾向の多型を、受精卵のゲノムを編集することでデザインされた子供を誕生させることが可能となった。近未来社会では、受精するとまず全ゲノムシーケンスして、あらゆる疾患を予防し、人類は全員が90歳近くまで疾患なく過ごし全員が老衰で亡くなる。争いや葛藤がなく、全員が穏やかに生涯を全うする。

また、科学の進歩はマイクロチップを脳へ埋め込むと、人工知能と連動して百科事典のデータをダウンロードできるようになる。また、地磁気感知や赤外線感知のチップを脳へ埋め込み、これまで人間が持たなかった知覚が可能となる。人類は科学によってあらゆる苦勞から解放されるところまできている。

しかし、争いを努力して解決し葛藤を苦勞して克服し、難しい人生の課題を工夫をこらして達成させたのは本人であり、主体性はその人にある。受精卵を編集してすべての疾患を予防し、高いIQと好ましい性格で葛藤も争いも困難もない人生を送れるようにしたのは科学であり、主体性はあくまで科学であって主体性なき人類はただ生かされるだけの存在と化する。

米国生命倫理学研究所長のLeon R Kassは次のように述べている。

「胎児が立派な珍味、『ヒトのキャビア』となりうることを誰かが見つけたとして、胎児を食べると言うのは、実行するのはいうまでもなく、考えただけで震えあがってしまう。ヒト胚は単なる食肉ではなく、ただの物でも、物体でもない。その出自ならびに潜在能力からして、もっと敬意を受けてしかるべき存在である。ごく普通の人々が、暮らしを支えよう、逆境や失望を克服しよう、子供たちの世話をしよう、親の面倒をみよう、隣人を助けようとさまざまな努力を重ねている。人生には無数の困難があり、我慢やあきらめ、寛容や親切、勇気や自制が求められる。」